書　評

『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」
――第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』
［小野寺拓也 著］（山川出版社，2012年）

永岑三千輝

第一次世界大戦をドイツは「兵士の革命」で終結させた。だが，第二次世界大戦ではドイツ国防軍は，最後の１年間にそれまでの5年間に匹敵する甚大な犠牲を出しながらも戦い抜いた。なぜ，ドイツ兵士たちは戦争末期，犠牲が累進的に増える中で，最後まで戦い抜いたのか。兵士は包囲網の狭まる中，ヒトラー・ナチス指導部に最後の最後まで従ってベルリン攻防戦を戦った。なぜ「兵士の革命」は起きなかったのか。

この根本的な疑問に答えるものとして，大戦末期のドイツ国民の「麻痺」状態が指摘されている。だが麻痺とはいったい何か。まさにこのドイツ人民衆の「麻痺」の内実と構造こそは，拙著『独ソ戦とホロコーストで』（日本経済評論社，2001年）でそれを解きほぐそうとした問題であった。その際，主として依拠した史料群は，ホロコーストの執行主体＝中心的担い手，すなわちヒムラーとハイドリヒを最高指導者・命令者とする親衛隊警察機構の作成した報告書であり，オスト・ドキュメント（千数百万人の被追放ドイツ人の体験記録など）であった。前者のなかでは特にアインザッツグルッペ（ソ連占領地に投入された親衛隊警察の特別出動部隊）が数日おきにベルリンの帝国保安本部に送る「事件通報・ソ連」，そして全支配地域に関する治安警察情報「国家警察重要事件通報」であった。それらには，ドイツ軍の広大な占領地域・軍後方地域の治安の状態，民衆の動向が戦局の推移ごとに総括されていた。しかし，史料の性格からして，前線において敵と戦う何百万の兵士たちがいったいどういう意識状態であり，それは戦局の推移とともにどのように変化したのかは分からなかった。

本書は，まさにその前線兵士の意識を彼らが故郷・故国に出した野戦郵便という文書史料に基づいて明らかにしようとするものである。この研究は第二次世界大戦の未解明の問題群の一つについて，誰も使ったことがない史料をもとに実証的に解明した画期的なものであり，大戦末期の兵士の野戦郵便を丁寧に読み込み，分析して，「ふつうのドイツ兵」の意識諸形態を豊かに立体的に――一筋縄ではいかない複雑で矛盾する諸相を含む――示して見せた。著者は，「いろいろなことに気づくのが遅い」（あとがき，254頁）というが，そもそも「遅

い」，「早い」は相対的概念であり，35歳にしてこのような深い内容のある問題提起的な歴史叙述を博士論文として書き上げ，さらにその二年後には書物として刊行したということは，むしろ，驚異的な早さと評価すべきではなかろうか。それを可能にしたのは未開拓の貴重な一次史料群，すなわちベルリン・コミュニケーション博物館所蔵の野戦郵便（2001年所蔵開始）に出会い，その魅力にひきこまれたことにあろう。著者によれば，それは「軍隊階級や野戦郵便番号，所属部隊や兵科だけでなく，生年月日や未婚・既婚の別，出身地，（可能な場合には）宗派，学歴などもデーターベースとしてもっており，従来の研究以上にきめ細かな分析が可能」（序章，11頁）なものであった。

第１章「史料としての野戦郵便」は史料論である。確かに野戦郵便は出来事と記録の間に時間的な差が少ない点で，矛盾や断絶含みの多様性を内包する個人の在り方をうかがうことができる「魅力」（22頁）をもっている。もちろん，野戦郵便は検閲を通過したものであり，国防軍や政府の措置に対する批判的な発言，スパイ・サボタージュ・破壊の嫌疑を呼び起こす発言などの禁止事項をクリアした手紙であり，その意味で大戦末期の兵士の意識を確認するには重大な限界がある。また個々の郵便は，十分な教育を受けた表現力・文章力がある市民層出身の兵士に行きつくことが多く，こうした「社会階層の偏差」を孕んでいるため，どれだけ兵士の意識を一般的に代表しているかという問題もある。

そうした史料上の問題点に配慮しつつ，⑴下士官・兵卒（職業兵士をのぞく），⑵国防軍の中核をなす陸軍所属のもの，⑶連合国軍がドイツ国境へと迫る44年９月以降に相当数の手紙を残しているもの，⑷10通以上のまとまった数の手紙が残っているものなどといった基準で膨大な史料群から抽出した手紙，すなわち，23人，4705通の手紙が本書の主たる史料である。抽出の結果，高学歴層が集まりやすい特殊兵科（無線兵，通信兵，工兵，衛生兵など）のウエイトが高くなっている。

この点に関し一言すれば，武器をもち前線の中の前線で敵と対峙し相手を殺傷する歩兵，数の上で一番多く犠牲も多い彼らが分析対象のウエイトの点で低いことが大戦末期の兵士の意識を評価する上でゆがみをもたらしていないか。最後まで頑強に戦い抜いたのは東部ドイツ領内に進攻したソ連軍と戦う軍隊であり，この最終段階の戦いに加わっていた一般兵士の手紙を抽出するという可能性と基準はありえなかったであろうか。仮にそれができたとすれば，より直接的に頑強さの意識構造が浮かび上がるのではなかろうか。

第二章「『ふつうのナチ』HK の場合」は，1915年生まれでアビトゥアを持つ一兵士についての事例研究である。彼は44年７月という大戦末期に前線に送

られ，頻繁に手紙を書いた人物であり，したがって系統的に意識変化を追跡できるからである。この教養市民の（準）軍隊・戦場体験を，全国労働奉仕団，訓練期，前線，前線後方という四つの時期に分けて，(1)ナチ・プロパガンダ，(2)上官，(3)戦友意識，(4)非自発性，(5)「慣れ」，(6)暴力経験，(7)帝国主義的・コロニアルな意識，(8)敗北と報復への恐怖という八つの視点から分析している。狂信的なナチではなく，むしろ上から押しつけられてくるプロパガンダには距離感を抱いている兵士が，圧倒的な無力感のなかで，非自発性という形で能動的にその無力感に対応していき，同時に，「常識」としてすでに内面化していた帝国主義的・コロニアルな意識という，広義の意味でのナチ・イデオロギーの一部をなす要素が戦場において噴き出し，戦場で遭遇した暴力や恐怖感と結びつき，主体的な暴力に転化しうる精神構造を剔出している。

第三章から第五章までは包括的な史料分析で，第三章「戦友意識・男らしさ」では，ドイツ軍の崩壊を回避させたのは軍隊内部の家族的結びつきであって，イデオロギーはごくわずかの役割しか果たしていなかったというテーゼを批判的に修正する。戦友たちの間のつながりと断絶を地域・社会階層・兵科・軍隊階級・前線と後方・世代・宗派・軍隊と一般社会・戦友と友人といった軍隊内部に存在するさまざまな属性ごとに細かく分析し，結論として，イデオロギーと戦友たちの人的結合は相矛盾するものではなく，むしろ相補的な関係にあってときに戦時暴力を急進化させうるものとしている。第四章「暴力・被害者意識・『主体性』」は，兵士たちが戦場で遭遇した暴力経験や，個や「主体性」が奪われている軍隊経験が，彼らに与えた影響や彼らの被害者意識，敵愾心や恐怖感，蔑視が果たす役割を分析し，敵住民やパルチザンに対して噴出するエネルギーを明らかにする。

さらに第五章「他者・自己イメージ」では，ユダヤ人やロシア軍・ボルシェヴィキ，英米軍，占領地や現地住民などの敵・他者イメージと，ヒトラー，祖国，「ドイツ民族」，故郷や家族などの味方・自己イメージを分析し，その両者の相関性を明らかにする。従来の研究では反ユダヤ主義や人種主義，反ボルシェヴィズム，あるいは人種原理を軸とした「民族共同体」といった，ナチ・イデオロギーの中心的要素とされるもの，ナチ「固有」の側面へと関心が集中していたと批判的に総括し，ナチズムがなぜ広範な人々から支えられたのかを明らかにするためには「日常的ナショナリズム」がナチ体制においてもっていた意味をとらえなおす必要があるという。ナチ「固有」のイデオロギーとは必ずしも言い切れない「伝統的」なナショナリズムの諸要素，「民族」や「国民」，「祖国」，あるいはカリスマ崇拝，秩序観念，清潔さといった「典型ドイツ的」

諸価値などが，大戦末期に戦争を継続させていくうえでもっていた重みを強調し，日常的ナショナリズムの諸観念と敵・他者イメージとの関係を明らかにしている。

そして，終章では，「何が兵士たちを最後まで戦い続けさせたのか」という根本的な問題意識のもとで行ってきた野戦郵便分析を通じて明らかになった大戦末期における「ふつうのドイツ兵」のイデオロギーと「主体性」の関係を総括している。驚くべきことに，ナチ・イデオロギーの中核的要素（著者によれば人種主義，反ユダヤ主義，反共産主義，社会ダーウィニズム，人種を軸とした「民族共同体」理念，反女性解放）には，「さほど重要な意味を見出すことができなかった」（248頁）とする。スラヴ人など周辺諸民族に対する伝統的な蔑視，敵愾心や恐怖心とそれに由来する「保護装甲」としての男性性，急進的なナショナリズム，広い意味での帝国主義・コロニアルなメンタリティ，あるいは市民社会の業績主義や「承認」願望など，ドイツに限らず総力戦を経験した近代国民国家において幅広く見られた要素のほうが，「圧倒的に重要であった」という。ナチ・イデオロギーの中核的要素であるヒトラー崇拝も，危機において偉大な人物に頼ろうとする帝政期以降ドイツにおいて蓄積されてきた政治的な集団メンタリティの延長線上にあるもので，ドイツ史の連続性のなかで理解することができるという。そして，「ナチ・イデオロギーを下支えしていたのは基本的に周辺的諸要素であったというのが，本書の結論である」（248頁）と。

「ふつうの兵士」の「主体性」について強調されるのは，「主体性の剥奪」と「過剰な主体」の二極しか存在しえない状況において蓄積される暴力性の契機である。「主体性の剥奪」がなされた「強制共同体」としての軍隊において，「強制共同体」と折り合わなければ生活や生存が困難になる以上，兵士は「被害者」として感覚を麻痺させる「能動的な非自発性」を身に着ける。彼らは行動可能性が極限にまで制限されているからこそ，数少ない手元にある可能性をフルに動員し，その選択的な行動を「主体的」な行為としてとらえ，奪われた主体性を耐えうるものにしようとした。「能動的な非自発性」を通じて徐々に感覚が麻痺し，暴力に次第に無感覚になっていき，その結果，「まずはわれわれの敵へ向か」わなくてはいけないというふうに，思考停止や感覚の麻痺がさらなる戦争状態を可能にしたとする。

以上の実証的な解明によって，われわれには未知だった「ふつうのドイツ兵」の大戦末期の多様な――ときに内部に対立や亀裂をもたらし頑強さを掘り崩す――意識諸形態がきめ細かく明らかにされている。今後，第二次世界大戦末期のドイツの兵士を考える場合にはまずもって参照されるべき重要な知見の

数々を問題提起的に示しているといえよう。その確認の上で一言するとすれば，著者自身もいうように，「結局，特殊ナチ的要素はナチ体制においてどれほどの意味をもっていたのか」という問題に突き当たる。第1に，野戦郵便のなかにナチ・イデオロギーの中核的要素が見いだせなかったとすれば，それはまさに野戦郵便という素材そのものに問題があるのではないか。第2にたとえば，中核的要素の1つ人種主義と「広い意味での帝国主義・コロニアルなメンタリティ」や「急進的ナショナリズム」とは上述のように切り離されているが，ナチズムにおいては人種主義が独り歩きするのではない。人種間の優劣の論理が帝国主義・植民地主義（優等な人種による武力による世界帝国の建設と劣等な弱小諸民族の支配抑圧）の行動と政策の正当化の武器ないし手段になっているという相互関係にある。「ふつうの兵士」が野戦郵便のなかでそうした正当化の議論を開示していないとしても，彼らの手紙に示される露骨な蔑視意識と苛烈な抑圧・鎮圧行動という素朴な形で人種差別的正当化の論理が自分の血肉と化しているということではないか。

さらに第3に，反ユダヤ主義が44年夏以降の大戦末期の野戦郵便のなかに表出していないのは，まさに，44年夏までにドイツ支配下のユダヤ人の絶滅が終了していた――「ふつうのドイツ兵」が故国と占領地で遭遇し感情や想念を刺激され反感を掻き立てられるような，イデオロギー的扇動とその受容の対象となるユダヤ人はもはや眼前・経験範囲にいなかった――ということの表れではないか。そうしたことを確認するには，末期の野戦郵便だけではなく，ポーランド侵攻から独ソ戦の展開，世界戦争への突入と総力戦の泥沼化・敗退過程の各段階の，すなわちホロコーストがラディカル化した諸段階のそれらを意識的に抽出し比較することが必要ではないか。

ともあれ，本書における一級の史料群の歴史学的総括は，冷戦体制崩壊後，90年代以降の重要な研究史への周到な目配りとそれらに対する鋭い批判的コメントと合わさって，ナチ体制の全体像との関連でわれわれの認識を深め，問い直させ，新たな問題意識を刺激するものとなっている。